主題検索の現状理解と今後の方向性について

1957年のドーキング会議に参加した分類学者たちが指示したこと

川村 敬一 著
主題文献精読会 編集

樹村房

Understanding of the Present State of Subject Retrieval and Looking for the Future Direction:

Consideration of Some Views Given by Those Classificationists Who Participated in the 1957 Dorking Conference

by
Keiichi Kawamura

edited by
Reading Circle on Indexing Theory

Tokyo
Jusonbo Co. Ltd.
2020

要　　約

1957 年 5 月に英国のドーキングで開催された第 1 回国際分類法研究会議は，分類理論に躍進をもたらし，ファセット分類法のさらなる研究開発を促した。しかし情報検索の世界で優勢を誇ったのは語の単純な一致と単純な掛け合わせによる事後結合索引法であった。検索の質的低下にくわえ，図書館情報学（LIS）は以下三つの要因によるパラダイム・シフト（前提変化）の問題に直面している。(1) インターネットの普及により知識の全分野の情報源にアクセス可能になる。(2) 利用者自身によるオンライン検索が一般化している。(3) 集中分類サービスにより分類者が以前ほど必要でなくなる。利用者自身による検索を支援するために，ドーキング会議に参加した分類学者のうち，(a) エリック・コーツとジャック・ミルズは完全にファセット化された新しい一般分類法の活用を提唱し，(b) ブライアン・ヴィッカリーは人工知能（AI）の技法を取り入れた検索インターフェイスのソフトウエアの開発を提唱していることを述べた。

Summary

The First International Study Conference on Classification Research held in Dorking, England in May 1957 brought about a breakthrough of classification theory and promoted further research and development of faceted classification. But what has been dominant in the information retrieval world is post-coordinate indexing system based on the principle of simple matching and simple coordination of words or terms. In addition to the decline in quality of retrieval, library and information science (LIS) is now faced with the problem of a paradigm shift caused by the following three factors: (1) the likely increase in general accessibility to information sources embracing all fields of knowledge because of the development of the Internet; (2) the popularization of online retrieval by users themselves; and (3) the need of fewer classifiers than before due to central classification services. Describes that a few of those classificationists who participated in the Dorking Conference pointed two alternative ways of aiding users in retrieval: (a) Eric Coates and Jack Mills suggested making good use of completely faceted new general classifications; and (b) Brian Vickery suggested the development of search interface software incorporating the technique of artificial intelligence (AI).

目　次

1.　序論　7

2.　国際分類法研究会議　8

3.　ドーキング会議の意義　10

3.1　参加者　10

3.2　会議録　11

3.3　分類法研究の躍進と道しるべ　12

4.　ファセット分類法の研究開発　14

4.1　専門分類法　14

4.2　記号法　14

4.3　一般分類法　16

4.3.1　幻の NATO 分類法

4.3.2　ブリス分類法の復活

4.3.3　UNISIST の変換言語

4.3.4　BC2 と BSO

5.　ロンドン会議の記念誌と会議録　25

5.1　記念誌と会議録の概要　25

5.2　記念誌に収載の回想と現状理解　26

5.2.1　ミルズの見解

5.2.2　コーツの見解

5.2.3　ラングリッジの見解

5.2.4　クレヴァードンの見解

6.　検索の質的低下と分類の衰退　30

6.1　日本の識者の警鐘　30

6.2　30 年法則と米国の事情　31

6.3　主題分析のレベル　32

6.4　コンピュータと分析レベル　33

6.5　代替不能な機能の看過　34

6.5.1　語彙統制の基盤としての分類表

6.5.2　索引言語の基盤としての分類表

6.6　分類衰退の原因　35

7.　ヴィッカリーの方向転換と情報学への傾斜　37
7.1　ロンドン会議の記念誌に収載の回想　37
7.2　ロンドン会議の会議録に収載の総括論文　38
7.3　方向転換の軌跡　38
7.3.1　CRG 宣言にまつわる悔恨の念
7.3.2　CRG 離脱
7.3.3　禁欲的中立主義
7.3.4　二人三脚
7.4　検索支援 AI システムの開発　41
7.5　インテリジェント・インターフェイスの実際　43
7.5.1　インターフェイスに必要な知識と技能
7.5.2　インターフェイスで活用の知識構造と知識表現
7.5.3　ヴィッカリーの役割分担
7.6　ヴィッカリーと情報学の課題　48
8.　分類の新たな役割　51
8.1　CRG 宣言の再考と索引言語の呼称変更　51
8.2　検索支援のツール　52
8.3　分類教育のツール　53
8.4　学問分野としての図書館分類法　54
9.　パラダイム・シフトと今後の方向性　57
9.1　二者択一　57
9.2　今後の課題　58
10.　総括　60
11.　結論　62

謝辞　64
引用文献　65
著者あとがき　75
本書刊行の背景　76
索引　78

表目次

表 1　ドーキング会議に参加した初期 CRG 会員　10
表 2　ドーキング会議の会議録の構成　12
表 3　ロンドン会議の記念誌における第 1 章の構成　25
表 4　ランガナータンとコーツの分析レベルの対応関係　32

1. 序論

図書館情報学（library and information science: LIS）という分野に身をおく者にとって，情報検索（information retrieval），特に主題検索（subject retrieval あるいは subject searching）の現状をどのように理解したらよいのか？　また，今後どのような方向をめざして努力したらよいのか？

これらの問いに答えるのは容易でない。理由は，第 1 に現在のコンピュータ検索の基本的方法論が確立するまでの経緯を知らなければならないからである。第 2 にインターネットの普及により知識の全分野の情報源にアクセス可能な状況ができつつあり，第 3 に利用者自身によるオンライン検索が一般化していることから，従来の視野の広さでは問題をとらえきれないからである。そして第 4 に整理技術あるいは資料組織化の業務に対する集中あるいは代行サービスの拡大により，図書館では検索のお膳立てをする仕事の量が減り，新たな目標を立てることが困難になってきているからである。要するに，冒頭の問いは身近な問題ではあるが，われわれを取り巻く状況が大きく変化しているため，誰でも手に負えるという性質のものではないと考えるべきである。

本書は 1957 年 5 月に開催された分類法研究の国際会議を起点に，その後の推移について会議に参加した分類学者たち（classificationists）が示した見解を考察することにより，そこから導き出される今後の方向性を見定めようとするものである。

2. 国際分類法研究会議

国際情報ドキュメンテーション連盟（Fédération Internationale d'Information et de Documentation: FID）は，深刻な財政危機により2002年5月に消滅したが，その起源は古く消滅から107年前の1895年までさかのぼる。

FIDの活動は，1962年以降は10前後の研究委員会（Study Committees）がそれぞれの課題に取り組む形で推進してきた[1]。最古の委員会はその起源を1924年にさかのぼるFID/CCC（Central Classification Committee：中央分類委員会）である。これはFIDの同義語とまで言われた国際十進分類法（Universal Decimal Classification: UDC）の維持・改訂をつかさどる最終決定機関である。現在はUDC Consortium（UDCC）として，FID本部があったオランダはハーグの同じ場所を拠点に活動を継続している。

FIDにはUDCに限定しない分類法および索引法の一般理論に関する委員会（Committee on General Theory of Classification: FID/CA）があった[2]。これは1951年に当時の事務総長であるオランダのドンケル＝ドイフィス（Frits Donker Duyvis, 1894-1961）の尽力により設立された。委員会の代表（Rapporteur-Général）には彼の要請を受けたインドのランガナータン（S.R. Ranganathan, 1892-1972）が就いた。FID/CAは1962年にFID/CR（Committee on Classification Research：分類法研究委員会）と改名された。以後，ランガナータンは他界するまでFID/CRの名誉委員長（Honorary Chairman）を務めた。

FID/CRは以下のように合計6回の国際分類法研究会議（International Study Conference on Classification Research）を主催している。

1957　ドーキング会議（英国）[3]
1964　エルシノア会議（デンマーク）[4]
1975　ボンベイ会議（インド）[5]
1982　アウグスブルグ会議（西ドイツ）[6]
1991　トロント会議（カナダ）[7]
1997　ロンドン会議（英国）[8][9]

このうち1957年のドーキング会議はFID/CRの設立以前に開催されて

いる。しかし FID が主催し，FID の英国代表である英国専門図書館情報機関協会（Association of Special Libraries and Information Bureaux: Aslib）が組織し，英国分類研究グループ（Classification Research Group: CRG）とロンドン大学図書館文書館学部（University of London School of Librarianship and Archives: ULSLA）が協賛していたことから，1962 年以降は FID/CR の第 1 回国際分類法研究会議と呼ばれるようになった。

上記 6 回の国際会議は分類学者たちの間では開催地名で呼ばれるのが常である。たとえばエルシノア（デンマーク名ヘルシンゲル：Helsingør）会議と言えば，それは 1964 年の第 2 回国際分類法研究会議を指すのである。現在，FID/CR の活動は 1989 年設立の国際知識組織化学会（International Society for Knowledge Organization: ISKO）が受け継いでいる。

3. ドーキング会議の意義

3.1 参加者

ロンドンから南へ約 35 キロ下ったサリー州のドーキング郊外の邸宅で開催された第 1 回国際分類法研究会議には，英米独仏蘭伊印の 7 ヶ国およびユネスコから 40 人近くの参加者が集った。組織委員会が厳選した参加者は錚錚たる顔ぶれで，中でも著名なところではランガナータン，その彼が 1920 年代にロンドン大学で分類法を教わったセイヤーズ（William Charles Berwick Sayers, 1881-1960），フランスのコルドニエ（Gérard Cordonnier, 1907-77）とド・グロリエ（Éric de Grolier, 1911-98），米国のシェラ（Jesse Hauk Shera, 1903–82）と彼の推薦を受けた若きガーフィールド（Eugene Eli Garfield, 1925-2017），ユネスコからは英国出身のホルムストロム（John Edwin Holmstrom, 1898-1982）が参加した。

表 1　ドーキング会議に参加した初期 CRG 会員（年齢順）

	ペンドルトン（Oswald William Pendleton, 1902-?）
	フェアーソーン（Robert Arthur Fairthorne, 1904-2000）
*	ファラデーン（Jason Edward Lewkowitsch Farradane, 1906-89）
	カイル（Barbara Ruth Fuessli Kyle, 1909-66）
*	パーマー（Bernard Ira Palmer, 1910-79）
	キャンベル（Derek John Campbell, 1910-87）
*	ウェルズ（Arthur James Wells, alias Jack Wells, 1912-93）
	ピゴット（Mary Piggott, 1912-2003）
	クレヴァードン（Cyril William Cleverdon, 1914-97）
	ウィトロー（Magda Whitrow, 1914-2001）
*	コーツ（Eric James Coates, 1916-2017）
*	フォスケット（Douglas John Foskett, 1918-2004）
*	ヴィッカリー（Brian Campbell Vickery, 1918-2009）
*	ミルズ（Jack Mills, 1918-2010）
	ラングリッジ（Derek Wilton Langridge, 1925-2000）
	エイチソン（Jean Aitchison, née Binns, 1925- ）

＊は創立会員

ドーキング会議はCRGが主導した国際会議であった。40人近くの参加者のうち21人が英国からで，そのうち20人弱が初期CRGの会員であった（表1）。CRG会員以外の英国からの参加者には上述のセイヤーズやAslib会長のウィルソン（Leslie Wilson）などがいた。

3.2　会議録

表2は会議録の目次に著者が補足を行ったうえでそれを一覧表にしたものである。論文の概要はあらかじめ参加者に知らされていて，これにより節約できた時間は討議に回された。討議の充実ぶりには目を見張るものがあり，その内容はCRG会員が記録した草稿をもとに，会議終了後2週間でヴィッカリーが要約した。

この会議の特徴は各テーマに関して明確な合意を見たことである。最初の重要な合意は，1955年に公にされたCRGの覚書（memorandum），すなわち「情報検索のすべての方法の基盤としてのファセット分類法の必要性」[10]が会議の基調（keynote）となったことである。CRGはランガナータン発案のファセット分類法を追求しながらも，既存のいかなる分類法にも荷担しないとした。この覚書は現在はCRG宣言（CRG declaration）と呼ばれている。

1952年2月に設立されたCRGは毎月（8月を除いて）会合を開き，ランガナータンが1930年代に打ち出したファセット分析を中心に討議を重ねてきた[11]。その存在は欧米およびインドの限られた分類学者には知られていた。それでもドーキング会議に参加した海外の研究者，および後に会議録に目を通した人たちは，誰もがそのレベルの高さに驚嘆した。特に課題論文（theme papers）として主題分野のファセット化の手順を論じたミルズ, 主題分野間の関係を論じたヴィッカリー, 記号法の諸原理を論じたコーツら3人の所論は，その後の分類法研究開発の出発点となった。この3人にフォスケットをくわえた年格好も同じ4人が, 互いに切磋琢磨しながら, 気鋭かつ多作を貫いてグループの名を高めたことから，後にCRGの四天王と見なされることになる。そしてCRG宣言を基調とした活動方針は12条からなる「結論と勧告」として本文を締めくくった[12]。

著者あとがき

本書の原稿は雑誌投稿論文として 2020 年 1 月下旬に完成した。1957 年から現在までの約 60 年間にわたり，CRG の活動を中心にファセット分類法の歴史・理論・実務について，さながら三重らせんを編むがごとくテーマに沿って論述を進めた。このため分量が規定の 2 倍になってしまい，2 回に分けての連載の可否について事前に打診したが，規定の壁は厚く査読には至らず，門前払いの苦汁を嘗めた。

テーマを共有する多くの方々にご高覧いただきたいとの一心で，1991 年発足の TP&D フォーラム（整理技術情報管理等研究集会）の仲間たちにメーリングリストを使って相談したところ，心温まる助言が次々と寄せられた。

その中で主題文献精読会の会員からブックレットとして編集・刊行したいとの申し出があった。それは著者の本来の意向（1 回で夏までに刊行）からすればまさに渡りに船であった。同精読会の鈴木学氏（日本女子大学図書館）と藤倉恵一氏（文教大学越谷図書館）は原稿に丹念に目を通してくださり，そのうえで雑誌投稿論文を図書として出版するための諸条件について助言をくださった。そして図書の体裁に仕上げるべく，共同作成の索引をくわえた編集の労まで執ってくださった。

2 月下旬に同精読会より印刷製本および流通販売の件に関して相談を受けたのが株式会社樹村房である。同社の大塚栄一社長は上記フォーラムに出席されていることもあり，テーマの重要性を即座に見て取り，出版を快諾してくださった。そして編集部の石村早紀氏は既定の出版事業が立て込んでいるにもかかわらず，6 月中旬に引き継いだ編集原稿に最終調整をほどこしたうえで立派な図書に仕上げてくださった。

過分のお力添えをいただいた上述の皆様には筆舌に尽くし難い感謝の念がある。

本書刊行の背景

山田常雄訳によるジャック・ミルズの『現代図書館分類法概論』が日本図書館研究会より刊行されたのは，1982 年 3 月のことであった。原著の刊行は 1960 年であったが，その理論の斬新さに感銘して熟読を繰り返したことを，私は覚えている。

それまでは日本十進分類法（NDC）とデューイ・十進分類法（DDC）しか知らなかった私は，この図書によって国際十進分類法（UDC），アメリカ議会図書館分類法（LCC），ブラウン・件名分類法（SC），ランガナータン・コロン分類法（CC），ブリス・書誌分類法（BC）など，多様な分類法が世界には存在することを知った。特に，ランガナータン・コロン分類法（CC）は，ファセット分析という革新的な主題分析法に基づく分類法であることを知った。

『現代図書館分類法概論』を読了後の 1986 年に，私はジャック・ミルズとヴァンダ・ブロートンが手掛けるファセット分類法，すなわちブリス書誌分類法第 2 版（BC2）の「序説と補助表」が 1977 年に刊行されていることを知り，BC2 の序説を熟読し，その卓越性を検証し続けた。

加えて，川村敬一氏からは，ファセット分析理論に基づいた分類法である簡略一般分類法（BSO）について，その存在を知らされた。早速，機械可読版を入手して内部構造を検証した。

2006 年 3 月に，図書館分類法と主題組織化に関心を抱く仲間とともに，「主題文献精読会」と命名した研究会を立ち上げた。研究会はほぼ毎月 1 回の割で会合を開き，14 年が経過した 2020 年 2 月には 135 回を数え，現在も継続中である。これまで課題とした精読文献を列挙すると以下のようになる。

(1) Vanda Broughton. *Essential classification* (Facet Publishing, 2004).

(2) Vanda Broughton. *Essential thesaurus construction* (Facet Publishing, 2006).

(3) G.G. Chowdhury and Sudatta Chowdhury. *Organizing information: from the shelf to the web* (Facet Publishing, 2007).

(4) Vanda Broughton. *Essential Library of Congress Subject Headings* (Facet Publishing, 2012).

(5) Vanda Broughton. *Essential classification*, 2nd edition (Facet Publishing, 2015).

(6) Vanda Broughton. *Facet analysis* (Facet Publishing, 2019).

【(5) は現在進行中であり，(6) は次期課題図書である。】

この度『主題検索の現状理解と今後の方向性について —1957 年のドーキング会議に参加した分類学者たちが指示したこと』と題する川村敬一氏の論考を，主題文献精読会がブックレットとして編集・刊行することになった。

論考は過去 60 年間にわたるファセット分類法の歴史・理論・実務について簡潔な記述を行い，明快な結論を示しているが，私が注目したのは著者が分類の衰退について語る次の個所である。

「問題の根源は分類の理論と実際の間のギャップにある。換言すれば，完全にファセット化された新しい分類法，特にこれまでの理論的成果を一身に具現した一般分類法が存在しなかったことが大きい。このギャップを埋めたのが BC2 と BSO であるが，その存在すら良く知られていないことが，分類衰退の何よりの証左である。」（36 頁）

そして論考の総括において次のように語る。

「20 世紀前半における図書館分類法の二大巨匠はブリスとランガナータンであった。ブリスは分野間の関係と記号法の研究で，ランガナータンは分野内の概念間の関係の研究で，長足の進歩をもたらした。それぞれの研究成果を具現した体系が BC と CC であった。

20 世紀後半は 1957 年のドーキング会議を起点に，英国の CRG が既存の分類法の不備を踏まえ，戦後の分類法研究の理論的成果のすべてを具現すべく，ファセット化された新しい一般分類法の開発を最大の目標とした。その結実が BC2（進行中）と BSO である。」（60 頁）

川村敬一氏は，主題組織化と主題検索の両面において，分類法，特にファセット化された一般分類法の重要性を語り，その具現化である BC2 と BSO の有効性の検証，あるいは再検証を，私たちに迫っている。

主題文献精読会　代表　光富　健一

[著者紹介]

川村敬一（かわむら・けいいち）

1948　青森市に生まれる
1976　図書館短期大学別科修了
職歴　元獨協医科大学
　　英国 BSO 委員会編集顧問などを兼任
学位　博士（創造都市）大阪市立大学
近著　“Eric Coates”. *ISKO Encyclopedia of Knowledge Organization*, 2018
　　“In Memoriam: Eric Coates, 1916-2017”. *Knowledge Organization*, 45(2) 2018
　　“Bibliography of published works by Eric James Coates”. *Knowledge Organization*, 45(2)2018
　　Bibliography of the British Technology Index. Tokyo, Jusonbo, 2015
　　『BSO, あるいは CRG の新一般分類表 ― 仮説と論証』博士論文 , 2013
　　BSO - Broad System of Ordering: an international bibliography. Tucson, University of Arizona Campus Repository, 2011 ほか
受賞　第 21 回図書館サポートフォーラム賞（2019）

[主題文献精読会について]

主題文献精読会は，光富健一，鈴木学を発起人として 2006 年 3 月に活動を開始いたしました。図書館における分類，件名，シソーラスといったインデクシング理論の研究をしています。メンバーはテーマに興味がある図書館員（元も含む）や教員などから構成されています。活動は月に一度例会を開催して関連文献の読み解きと内容についての意見交換をしています。

成果物の作成をゴールとせず，メンバーそれぞれの「勉強の場」として，お互いに刺激しあいながら高めあう会となっています。

主題検索の現状理解と今後の方向性について
1957年のドーキング会議に参加した分類学者たちが指示したこと

2020年７月31日　初版第１刷発行

〈検印省略〉

著　　者 ©　川　村　敬　一
編 集 者　　主題文献精読会
発 行 者　　大　塚　栄　一

発 行 所　株式会社 樹村房 JUSONBO
〒112-0002
東京都文京区小石川5-11-7
電　話　03-3868-7321
ＦＡＸ　03-6801-5202
振　替　00190-3-93169
http://www.jusonbo.co.jp/

DTP・デザイン／藤倉恵一
印刷・製本／亜細亜印刷株式会社

ISBN978-4-88367-345-2
乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。

◉既刊関連図書◉

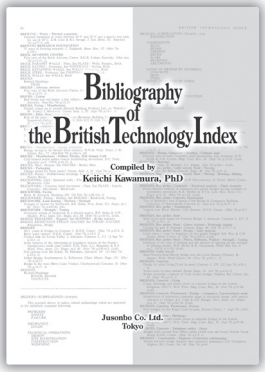
Bibliography of the British Technology Index

Compiled by
Keiichi Kawamura, PhD

●内容説明●

本書は英国図書館協会が 1962 年に創刊した月刊の英国技術索引（British Technology Index: BTI）に関する英文書誌である。収録文献は 1958 年から現在までの約 320 件で，BTI に関する研究論文や報告書のほか，書評，レター，ニュース記事などを網羅している。

収録文献の記入項目は正確な書誌データと内容分析による詳細な英文抄録からなる。項目は分類順に配列され，これを項目間の相互参照，著者索引，言語索引が補足している。巻末の付録は，BTI の初代編集長で索引システムの考案者でもあるエリック・コーツ（Eric James Coates, 1916-2017）の著作タイトルの年代順リストである。



コーツは主題索引の天才（the genius of subject indexing）の異名をとり，英米加豪の索引家協会（The Society of Indexers）は BTI を索引の傑作（the indexing masterpiece）とたたえ，その原理を学ぶように推奨している。本書は索引誌 BTI の全容と書誌サービスにおける最高水準の索引法の理解に資する世界に先駆けた英文書誌である。

なお，抄録つき分類順配列の本書は，文献調査のためのツールにくわえ，目次を見て概略をつかんだら，本文を物語としても通読できる。

A4判／123頁　本体3,000円＋税　ISBN978-4-88367-250-9

〒112-0002　東京都文京区小石川5-11-7　樹村房　TEL：03-3868-7321　FAX：03-6801-5202
URL：http://www.jusonbo.co.jp/　E-mail：webinfo@jusonbo.co.jp